

病をみつめて

(前回までのあらすじ) 仕事のストレスで胃もたれや食欲不振などを訴え始めた山本氏(42歳、中間管理職の会社員。妻、子一人)。不眠や倦怠感が更にひどくなるが、内科病院で異常は見つからず、さっぽろ香雪病院の心療内科を受診。医師の診察と服薬で、一度は落ち着いて帰宅した彼であったが…。

危機を乗り越え

自宅に戻った山本さんは、さっそく処方された薬を信頼して飲んだ。翌日からぐっすり眠れるようになり、朝の倦怠感も徐々に軽くなってきていた。しかし、まだ言いようのない憂うつ感が残り、仕事に集中できず、同僚や部下の刺すような視線についても怯えていた。ある日、彼は発作的に手持ちの薬をまとめて飲み、自殺を図った。幸い発見が早く、救急病院で一命をとりとめた。

再び受診した際に「本当に治るのだろうか」という不安が急に募ってきたのです。仕事も思うように進まず、自分の病気が職場のみんなにバレるのではと怖くなり、気づいた時にはもうらつた薬を全部飲んでいました。

初めての入院生活

山本さんと妻は入院生活についての概要をソーシャルワーカーから聞いた。妻は不安に思っていた会社への連絡や、入院中の収入補償について相談した。山本さんはもう退職するしかないと絶望していたが、話していく中で上司には本当のことを伝えることにした。

欠勤中の補償は健康保険から

山本さんは疲弊し、妻もやつれていた。医師に入院を勧められ、妻もそれを見たが、山本さんは揺れ動いていた。有給休暇をすべて消化してしまったので後がなく、仕事も山積していた。「きちんと治療すれば治りますよ。辛い状態で仕事を続けるより、早いうちに静養した方が会社のためだし、これから山本さんのためにもなるのではないかですか。」医師の説得に、彼は小さく頷いた。

ゆったりとした4人部屋の窓側のベッドに体を横たえ、天井をボーッと眺めていると、担当医師がやってきた。初診でみてくれた先生だった。「いろいろあつたようですね。今はとにかく心身ともにゆっくりと休みましょう。気持ちを落ちさせ不安を和らげる薬も出しますから。」もう、この先生にお任せしよう」と彼は思った。

夕方に職場の上司が面会に来た。幸い上司は彼の病状を理解し、「待っているのでゆっくり治すように」と、彼の仕事を一時引き継ぐことを約束してくれた。その夜、今までの



一日の流れ

| |
|--------------------|
| 起床・洗面・検温 |
| 朝食(7:40) |
| ラジオ体操 |
| 診察 |
| 病棟行事・作業療法・レクリエーション |
| 昼食(12:00) |
| 診察 |
| 病棟行事・作業療法・レクリエーション |
| 夕食(18:05) |
| 消灯(22:00) |

病室に戻ると、同室の太田さんが規則正しい生活と服薬で、日一日

生活が走馬灯のように駆け巡った。妻や上司に申し訳なく、自分の無力感などやり場のない思いが渦巻き、涙が止まらなかつた。巡回してきた看護士にその思いを話すと、「自分のペースを掴むまで、焦らないで一緒に治していきましょう」と言われ、ほっとしていつしか眠りに落ちていつた。

入院一週間後



SDS(自己評価式抑うつ尺度)

20項目の質問があり、各項目を4段階評価し、総合点で抑うつ度を知る。

Y-G(矢田部・ギルフォード性格検査)

120の質問の答えを、12尺度から見た特性やその傾向から類型別に分類する。情緒安定性、社会適応性、対人関係の持ち方などの傾向を知る。

パウム・テスト

一本の樹を描いてもらい、空間象徴理論や筆跡学などの理論を基に分析し、無意識のイメージを知る。

当院には現在2名の臨床心理士がいます。検査以外にも必要に応じて個人療法を行い、集団心理療法のメニューも充実させています。実際の治療場面以外でも、多くの行事に参加し、患者さんとの関わりを深めています。院内勉強会では他職種へ心理学的知識・技術の提供をしたり、院外の研修にも積極的に参加し、常に研鑽を重ねています。

一日の流れ

| |
|--------------------|
| 起床・洗面・検温 |
| 朝食(7:40) |
| ラジオ体操 |
| 診察 |
| 病棟行事・作業療法・レクリエーション |
| 昼食(12:00) |
| 診察 |
| 病棟行事・作業療法・レクリエーション |
| 夕食(18:05) |
| 消灯(22:00) |

病室に戻ると、同室の太田さんが規則正しい生活と服薬で、日一日

生活が走馬灯のように駆け巡った。妻や上司に申し訳なく、自分の無力感などやり場のない思いが渦巻き、涙が止まらなかつた。巡回してきた看護士にその思いを話すと、「自分のペースを掴むまで、焦らないで一緒に治していきましょう」と言われ、ほっとしていつしか眠りに落ちていつた。

病室に戻った山本さんは、さっそく処方された薬を信頼して飲んだ。翌日からぐっすり眠れるようになり、朝の倦怠感も徐々に軽くなってきていた。しかし、まだ言いようのない憂うつ感が残り、仕事に集中できず、同僚や部下の刺すような視線についても怯えていた。ある日、彼は発作的に手持ちの薬をまとめて飲み、自殺を図った。幸い発見が早く、救急病院で一命をとりとめた。

再び受診した際に「本当に治るのだろうか」という不安が急に募ってきたのです。仕事も思うように進まず、自分の病気が職場のみんなにバレるのではと怖くなり、気づいた時にはもうらつた薬を全部飲んでいました。

再び受診した際に「本当に治るのだろうか」という不安が急に募ってきたのです。仕事も思うように進まず、自分の病気が職場のみんなにバレるのではと怖くなり、気づいた時にはもうらつた薬を全部飲んでいました。

初めての入院生活

山本さんと妻は入院生活についての概要をソーシャルワーカーから聞いた。妻は不安に思っていた会社への連絡や、入院中の収入補償について相談した。山本さんはもう退職するしかないと絶望していたが、話していく中で上司には本当のことを伝えることにした。

欠勤中の補償は健康保険から

病室に戻った山本さんは、さっそく処方された薬を信頼して飲んだ。翌日からぐっすり眠れるようになり、朝の倦怠感も徐々に軽くなってきていた。しかし、まだ言いようのない憂うつ感が残り、仕事に集中できず、同僚や部下の刺すような視線についても怯えていた。ある日、彼は発作的に手持ちの薬をまとめて飲み、自殺を図った。幸い発見が早く、救急病院で一命をとりとめた。

再び受診した際に「本当に治るのだろうか」という不安が急に募ってきたのです。仕事も思うように進まず、自分の病気が職場のみんなにバレるのではと怖くなり、気づいた時にはもうらつた薬を全部飲んでいました。

再び受診した際に「本当に治るのだろうか」という不安